

静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れ：  
グローバル化時代の日本留学とその暮らし

比留間 洋 一

# 静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れ

## ：グローバル化時代の日本留学とその暮らし

比留間 洋 一

### 1. はじめに

#### (1) 目的

本稿の目的は、各種統計資料及び短期フィールドワークから得られた資料を基に、静岡県におけるベトナム人留学生受け入れの歴史と現状について予備報告を行うことである。本稿に何らかの意義があるとすれば、第一に、グローバル化時代の留学生獲得競争<sup>1</sup>において、日本の一地方である静岡県に、どのような可能性や課題があるのかを考えるための素材としての意義、第二に、あまり知られていなかったベトナム人留学生の暮らしについての素描を提示する意義であろうか。さらに付け加えるならば、日本そして静岡で日夜奮闘しているベトナム人留学生たちと、これから留学しようと考えているベトナムの若い人々に対するささやかな声援の気持ちを込めている。

#### (2) 日本と静岡のベトナム人社会とその研究史

日本のベトナム人社会を対象とした先行研究では難民研究が充実しており、近年になってからは研修生をめぐる報告が現れている<sup>2</sup>。留学生については、20世紀初頭の民族運動家ファン・ボイ・チャウをリーダーとする東遊運動に関する研究蓄積が顕著である他、1960年、1970年代のベトナム戦争期に反戦運動を展開した南ベトナム留学生が一時期注目を集めた<sup>3</sup>。

表1（表は巻末参考資料を参照）は、1999年末の日本在住ベトナム人を示したものである。総計1万4898人が、「来日中のベトナム人」4480人、および「日本在住ベトナム人」1万418人の2つに大別されている。1975年以降に難民として来日した「定住者」が5401人、およびその家族である「永住者」が3903人と最も多く、この1999年

1 日本では文科省ほか関係省庁が2008年7月に、2020年を目途とした「留学生30万人計画」を策定している。

2 例えば難民研究には(川上2001)、(戸田2001)など、研修生については(樽松2008)などがある。

3 例えば東遊運動には(白石)など、南ベトナム留学生については(永井ほか1973)などがある。

に、2冊の代表的な難民研究が刊行されている。これに対して、留学生は599人、全体の比率では4.0%に留まっている。就学生（主に日本語学校の日本語学習者）は92人で、留学生と就学生を合わせても全体の比率では4.6%に過ぎなかった。

#### ・増加する留学生・就学生の割合

表2は2003年から2007年にかけての主な在留資格別の在日ベトナム人数の推移である。2003年の総数1万6682人のうち留学生の人数は1545人で全体の比率では9.2%（就学生を合わせると11.1%）、2007年の総数2万5439人のうち留学生の人数は2930人で全体の比率では11.5%（就学生を合わせると14.6%）、というように増加している。

出身国別で見た場合<sup>4</sup>、2005年の時点では多い順に、中国（約8万人、構成比66%）、韓国（約1万5000人、構成比12%）、台湾（約4000人、3.4%）、マレーシア（約2100人、1.7%）、ベトナム（1745人、構成比1.4%）であった。1745人のうち国費は531人（構成比30.4%）である。注目すべきは前年比11.3%増<sup>5</sup>、という高い数値であり、その結果、2008年時点では2873人（構成比2.3%）となり、マレーシアを抜いて4番目に多くなった。

#### ・静岡県の在留資格別ベトナム人

表3は、2009年2月現在の静岡県における市町村別のベトナム人数（外国人登録者数）である。第一に、受け入れ人数の点からいえば、浜松市（1020人）が群を抜いて多く、静岡市（312人）、沼津市（155人）が続くというように主要3都市に多く、全体としてはやや「西高東低」ということができる。第二に、同じ在留資格の人が同じ地域に集まる傾向がある、ということができる。

静岡市についてはすぐ後に示すように在留資格がわかっているが、それ以外の市町村については未調査である。ただ、浜松市、湖西市（76人）に「定住者」、「永住者」など、もともと難民であった人々が多いことは確実である。同様に静岡県の西部では、磐田市（57人）、袋井市（52人）には「研修生」を受け入れている企業があると聞いている。いっぽう東部では、沼津市（155人）に「研修生」が、伊豆の国市に元難民の人々が数世帯住んでいると聞いている。

#### ・静岡市内では留学生が最多

表4-1・表4-2は、2009年5月1日及び2008年6月現在の静岡市の在留資格別、性別の人数である。留学生が最多となっている。その理由は、後に詳述するように、ベトナム人就学生・留学生を多く受け入れている日本語学校や専門学校、短大・大学・

4 平成20年度外国人留学生在籍状況調査結果-JASSOによる。

5 2008年5月1日現在の日本の留学生総数は12万3829人で過去最高に達したが、それでも前年比5331人（4.5%）増であり、ここからもベトナム人留学生の増加率の高さを窺うことができる。

## 静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れ

大学院、そしてアパートや大家、アルバイトが静岡市に多く集まっていることに求められる。留学生の構成比は、2008年6月時点の22.7%から2009年5月の27.7%へと増加しており、留学生と就学生を合わせた人数の構成比は2008年6月の45.9%から2009年5月の53.8%へと全体の半数以上を占めるようになった。留学・就学の性別比は、(日本人の配偶者を除く)他の在留資格に比べて、女性の多さが目立ち、男性の約2倍である点に特徴があるといえよう。

## (3) 調査について

以下の調査は主に2009年6月～7月にかけて実施した。

歴史に関する資料では2つのトピックを取り上げる。そのうち、①20世紀初頭のファン・ボイ・チャウをリーダーとする東遊運動において、最初に静岡県が受け入れたベトナム人留学生が誰であったのかについては(白石1993)や(安間編2003)などの文献資料のほか、確認のため、浅羽町を訪問した。訪問に際しては浅羽ベトナム会の安間氏の協力を得た。②もう一つのトピックは、ベトナム戦争中の南ベトナム留学生である。1970年代(1940年代の南方留学生については未調査)に東海大学で海洋学(造船)を学んだ後、そのまま静岡に住んでいる2人の南ベトナム元留学生の方にはお会いすることができなかったが、一人の方の息子さんにお話を聞くことができた。

現状に関する資料では、県庁大学室、静岡市国際交流課・外国人登録の窓口、各種ホームページ(入管、静岡県、VYSA<sup>6</sup>やDong Duなどベトナム人留学生関係団体)を利用したほか、とくに県内の機関の受け入れ人数の推移やベトナムの大学や部局との協定については、3つの大学(静岡大、静岡産業大、県立大)の担当者(教員、事務)から資料の提供と説明をしていただいた。日本全国のベトナム人留学生については、日本学生支援機構(JASSO)が統計資料を作成してくれた。静岡市内の3つの日本語学校を訪問して理事長から資料や説明をしていただき、そのうち現在もベトナム人受け入れを多く行っている2つの学校の理事長および先生から、「ベトナム広場」<sup>7</sup>の場において講演していただいた<sup>8</sup>。

ベトナム人留学生の協力を得た調査については、若干名の卒業生からの聞き取り及び、現在の留学生を対象とした若干回の参与観察(サッカーとその後の夕食会、2人の部屋を訪問)と、インタビュー調査を実施した。インタビューは一人1時間から1時間半をかけた個人面接形式(計6人)と、6人から一度に聞き取りを行ったグループ面接形式を1回行った(計12人)。調査協力者の方々には、ここに記して謝意を表

6 Vietnamese Youth and Student Association in Japan(<http://www.vysa.jp/>)

7 2009年8月に発足した静岡とベトナムの交流拡大を目的としたネットワーク(<http://vietnamhiroba.eshizuoka.jp/>)。代表を五島文雄静岡県立大学教授、事務局長を筆者が務めている。本稿は第1回セミナーにおける筆者の報告を基にしている。

8 講演者は、増田一氏(静岡日本語教育センター理事長)、市毛大輔氏(静岡日本語教育センター常務理事)、末續辰一郎氏(国際ことば学院理事長)。

したい。

## 2. 静岡におけるベトナム人留学生受け入れの歴史

### (1) ファン・ボイ・チャウとリ・チョン・バらの浅羽町訪問滞在 (1918年)

現在の静岡の県域内で、史上最も早くベトナム人留学生を（短期間ながら）受け入れたのは、浅羽村の人々（現在は磐田市浅羽町）であったと思われる。正確に分かっているのは<sup>9</sup>、1918年のことであった（安間編2003）。事の発端は、1907年、ファン・ボイ・チャウをリーダーとする東遊（ドンズー）運動（フランス植民地支配からの独立を目的として、日本に留学生を送る運動。1905年から1908年まで約200人が来日したとされる）で来日し、行き倒れたグエン・タイ・バットを浅羽佐喜太郎が助けたことに由来する。このことにより浅羽は東遊運動のベトナム人留学生の間で「義侠の人」として知られるようになり、一時期はクオン・デ（ベトナム最後の王朝、阮朝の皇族の一人）も、浅羽の経営していた小田原の病院に滞在していたこともあった。1907年に日本政府がフランス政府との間で協約を締結し、日本在住のベトナム人留学生が解散を命ぜられ国外退去になる中、求めに応じて快く大金を送ってよこした浅羽に、ファン・ボイ・チャウが感激したこともあった。1918年、逃亡先の中国から来日したファン・ボイ・チャウは恩人の浅羽を訪ねようとするが、浅羽はすでに1910年に鬼籍に入っていた。ファン・ボイ・チャウは、リ・チョン・バラ二人<sup>10</sup>と共に、浅羽村に来て、浅羽佐喜太郎のために記念碑を建立した。このとき3人は浅羽村に約1カ月滞在したようである。

ところで、現在の視点から振り返ってみたときに、この三人の滞在は何を残してくれたであろうか。1つには、ファン・ボイ・チャウ（1867-1940）はホー・チ・ミン以前の民族独立運動家として有名な人物であり、浅羽町に特別な地域資源<sup>11</sup>を残したことがあげられよう。2005年より浅羽町では「浅羽ベトナム会」という市民団体を組織、以来活発な活動を展開し、近年では、郷土史上的一幕という範囲を超え、大使館をも巻き込んだ日本ベトナム両国の交流活動の一翼を担うようになってきている<sup>12</sup>。これに対し、リー・チョン・バーはそのような知名度は全くないが、浅羽では、漢詩を残し、バイオリンを弾き、写真機を持っていた、というように、高い文化的素養をもっていたという印象を強く残している。リー・チョン・バーはゲアン省出身のカトリック教徒で、1908年に来日。解散命令後、中国籍を取得し、名古屋高等工業、東京帝大を卒業

9 1918年以前にも、小田原の病院から浅羽村の浅羽佐喜太郎の実家に何人かの留学生を移転させた、とあるが、いつのことかは明示されていない（安間編2003）。

10 もう一人が誰かは判明していないが、安間氏はクオン・デではなかったかと推察している（安間編2003）。

11 浅羽ベトナム会代表の安間氏は、2003年時点では文化財研究会・浅羽町まちおこし協会に所属していた。

12 浅羽ベトナム会代表の安間氏からの聞き取りによる。

後、中国で技師をしたことなどがわかっている（安間編2003）。

(2) 東海大学海洋学部の漆畑雄樹（Hung）氏と室伏勇男（Dung）氏（1960年代～70年代）

ベトナム戦争中、南のベトナム共和国から来日した南ベトナム留学生たちは、1969年から1976年の間「ベ平統」（ベトナムの平和と統一のために闘う在日ベトナム人の会）という組織を立ち上げ反戦運動を展開し、日本とベトナム（南ベトナム共和国政府と東京の大使館）両政府から受けた仕打ちとそれに対する支援活動などで、留学生研究の中でも注目された（永井ほか1973、田中2008[1995]）。南ベトナム留学生の正確な数は未詳だが、ベトナム戦争終結（1975年）頃、東京を中心に約160人がいたとされ、その6分の1（約26人）が日本にそのまま残り、それ以外は主にアメリカやカナダに移住したとされる（宮島1998）。

この時代、静岡では、（少なくとも）2人の南ベトナム留学生を受け入れた。一人は漆畑雄樹氏（日本名）である。漆畑氏は1967年来日、清水にある東海大学海洋学部、同大学院で船舶工学を学んだ。漆畑氏の長男の話では、当時、南ベトナムでは造船業が盛んであったが、漆畑氏が就職活動を行った頃には造船業が低迷し就職できなかった。そのような中、静岡の女性（漆畑姓）と結婚し、1976年、静岡（日本平パークウェイ沿い）にベトナム料理店サイゴンをオープンさせた。（東京に次いで）日本で2番目に古いベトナム料理レストランであったらしい。しかし、レストランはうまくいかず、漆畑氏は保険会社に長く勤務した。その後、ベトナム・レストランを再開。他にも、長男からの聞き取りでは、ベトナムとの貿易や、静岡県内でのベトナム語法廷通訳などいろいろなことを手がけていた。現在（2009年）はレストランを長男に任せ、妻と二人でベトナムの避暑地ダラットで暮らしている。

もう一人は室伏勇男氏、ベトナム名はブイ・ゴック・ユン氏である。1971年来日し、東海大学で造船学を学んだ点で、室伏氏の後輩にあたる。卒業後、造船会社に就職したが、2年後の1978年造船業の不況を期に自動車関係の会社へ転職。その後、1986年に自動機械設計事務所を静岡市内に開設<sup>13</sup>。現在、日本人と結婚し静岡市内に在住している。

現在の視点から振り返った場合、この2人が残してくれたものとして、漆畑氏の場合、1つには、レストランや法廷通訳などの面で長年、静岡とベトナムの架け橋として、ある意味では孤軍奮闘してきたことがあげられよう。室伏氏の場合、本稿との関連で注目されるのは、1993年に「ベトナムに日本語学校を！！」と呼びかけ（国際ことば学院 2009）、ベトナム訪問団の団長を務めるなど、後のベトナム人の静岡への留学に足跡を残している点である。この話題についての詳細は後述する。同様に、日

13 （国際ことば学院 2009）より。

本語学校への協力としては、室伏氏の場合、2000年9月に「国際ことば学院」の保証人になっていることが資料『地球通信』（国際ことば学院 2009）からわかる。

### (3) 日本語学校における受け入れ（1990年代～）

1976年のベトナム統一後は、もっぱら日本政府の国費留学生として、ベトナム人留学生が来るようになった。が、静岡の大学がベトナム人留学生を本格的に受け入れるようになったのは1990年代半ば以降のことであった。静岡における1990年代半ば以降のベトナム人留学生たちの大多数は、日本語学校で学んでから大学・大学院等に進学する私費留学生たちであった。静岡県において、これまで最も多くのベトナム人就学生・留学生を受け入れてきた日本語学校は、国際ことば学院と静岡日本語教育センターの2つである。

#### ・静岡市の3つの日本語学校

1990年、1991年に、静岡市内に3つの日本語学校が開校した。このうち静岡インターナショナル・スクールは、創設者は常葉学園関係者で、現在の校舎は常葉短大の近くに所在する。ベトナム人就学生は数人受け入れたことがあるが、その後は受け入れていない。

#### ・静岡日本語教育センター

3つの学校のうち最も早くベトナム人を受け入れたのは、静岡日本語教育センター（以下、「教育センター」と略記）であった。教育センターは1990年に第1期スタート。創設者の石原康彦氏（故人、前理事長）は、日中友好協会役員で、元来中国との関係が深い学校である<sup>14</sup>。市毛氏によれば<sup>15</sup>、創設者の石原氏は、1945年生まれで、学生運動を経験し、ベトナム戦争の反戦運動を通じてベトナムに関心をもった<sup>16</sup>。その後、貿易会社においてベトナムとの貿易の仲介をしてベトナム人と触れ合った。そしてゲン・ドゥック・ホエ氏<sup>17</sup>が静岡で働いていた頃（1980年代か。研修で富士市に滞在していたらしい）に知り合ったらしい。一方、ホエ氏は1991年にホーチミン市にドンズー日本語学校を設立した後、留学生受け入れを日本の知り合いに依頼していたが難航していた。そのような中、東大の新星学寮時代にホエ氏と親交のあった新石正弘氏（故人）が改めて石原前理事長をホエ氏に紹介した。「石原さんは2つ返事で快諾して

14 現在は3割を占めるベトナム人以外にも多様な国籍出身者からなる「国際色豊かな学校」（第2回「ベトナム広場」における市毛氏の発言）になっている。

15 第2回「ベトナム広場」での講演内容による。

16 なお国際ことば学院の末續理事長の場合も、「1941年長崎市にて出生」、「1968年～70年学生運動。静岡大学職員辞職」（第2回ベトナム広場での配布資料「I. 末続に関する資料」より）というように石原元理事長と経歴が一部類似しており興味を引く。

17 ホエ氏、新星学寮については（朝日新聞社 2006）を参照。

## 静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れ

くれたので非常にホッとした」と、後にホエ氏は石原氏に話していたらしい。

このような経緯で、教育センターは、1992年より、ベトナム・ホーチミン市のドンズー日本語学校からベトナム人を受け入れ、1996年には「ベトナム青少年を支援する会」を設立、静岡県西部の実業家のベトナム進出企業が受入、アルバイト、奨学金などの面で協力することなどもあり、これまでに通算で約200人のベトナム人を受け入れ、2009年時点では全学生数168名のうち25人のベトナム人が在籍している。

#### ・国際ことば学院

以下、国際ことば学院の事例についてより詳細に紹介する。理由は次の2点である。

第一に、国際ことば学院（以下、ことば学院と略記）では、1994年4月に5名のベトナム人男性を受け入れて以来、1998年3月10日までの初期の約4年間に限ってみても、49人のベトナム人を受け入れてきた<sup>18</sup>。2008年11月31日現在、総数282人のうち、就学生72人、留学生3人のベトナム人が在籍している<sup>19</sup>。このことから、ことば学院は、教育センターと共に静岡のみならず、日本における私費ベトナム人留学生受け入れの先行事例であり、いまも拠点の1つとなっていること。

第二に、教育センターよりも詳細な資料が入手できたこと。その資料は、『地球通信 月刊継続総輯篇 上巻』（学校法人 国際ことば学院、2009年1月）及び同下巻（学校法人 国際ことば学院、2009年1月）である。「地球通信」とは、ことば学院が1993年3月に発行を開始した月刊のニューズレターである。上巻には第1号（1993年3月）より第100号（2002年6月）まで、下巻は第101号（2002年7月）より第150号（2007年4月）までが収められており、学校の歩みとともに、一人ひとりの留学生について来日時期、保証人、奨学金、イベント参加、進路先などを窺うことができる貴重な資料である。

ベトナム人留学生受け入れという点で注目すべき、ことば学院の特徴は以下の諸点であろう。

まず、ことば学院の歴史を概観すると、次の通りである。1991年10月開校認可。1992年1月最初の学生10人（中国人）が神戸港に着く。1993年3月、静岡市北の自宅（末續理事長）に校舎を新築移転。『地球通信』発行開始。1996年、外国語専門学校設立計画を『地球通信』紙上で発表。2009年4月、外国語専門学校開校。

専門学校開校へと展開してきた歩みはことば学院の第一の特徴といえる。ここには末續理事長の次のような意向が大きく反映していると思われる。

「今、国際ことば学院は専門学校に収まり切れないと、痛切に感じています。やはり大学、大学院です。コンピューターと語学が融合した実践的な技術大学です」（2009

18 『地球通信 上巻』を基に筆者が作成した資料による。

19 第2回ベトナム広場における配布資料「I. 末続に関する資料」より。



年1月『地球通信』末續理事長の言葉)

第二の特徴は、「教育センター」が、主にドンズー日本語学校創設者ホエ氏の意向(ベトナムの発展のために日本から学ぶべき分野は理工系であり、文系はベトナムに応用しにくい<sup>20</sup>)により、理工系、経済経営重視である<sup>21</sup>のに対して、「国際ことば学院」は文系の学部・大学院にも多数の留学生を輩出していること。

第三の特徴は、「教育センター」がベトナムの北部・中部・南部それぞれの地域から募集、選別しているのに対して、「ことば学院」はホーチミン市在住者が多いことがあげられる<sup>22</sup>。

つぎに、ことば学院によるベトナム人受け入れがどのように行われたのかについて、受け入り前後の動きを、『地球通信』に基づいて具体的にみてみたい。

先述したとおり、1993年3月に校舎を新築移転。末續理事長は次のように回想している<sup>23</sup>。「自宅が学校になって、私は精神的に本当に楽になった。-略-」「私は自信を回復し、積極的に学校作りに乗り出した。第I<sup>24</sup>にやったことは、学生募集の改善であった。1993年秋にインドネシアを訪問し、翌年4月生からインドネシアからの留学生を受け入れるようにした。」

なぜ学生募集の改善が必要であったのだろうか。その一端について次の文章から窺うことができる。『地球通信』(1993年12月)に、「後援会の発足について 学院長 徳松節子 理事長 末續 晨一郎」と題して、次の文章がある。「開校以来2年余を経過しました。-略- しかし、一方で学生の状況は、就学生制度の矛盾や経済不況の影響をまともに受けて、さらに困難が深まっており-略-」。この背景の一つは、1992年以降、全国の日本語学校において中国人就学生が「問題」を起こしたり、減少したりしたことにあると思われる(浅野1997:41)。ことば学院においても、上記の頃(1993年)までは、中国、韓国、バングラディッシュ、インドからの学生を受け入れており、数の上では中国が最も多かった。学生募集の改善とは、新たな募集先を開拓し、安定した募集方法を確立することであったと思われる。

このような中、1993年9月、『地球通信』上では、元南ベトナム留学生の室伏勇男氏が「ベトナムに日本語学校を！！」と呼びかける次の文章を寄せた(以下の引用では原文にあるルビ省略)。

「ベトナムに日本語学校を！！ ・・・・ご協力お願いします！ 室伏勇男 (Bui

20 留学生を含む関係者数人からの聞き取りによる情報。

21 理工系志望者の場合、静岡県内には静岡大学以外に希望する機関があまり多くないという話が聞かれた。理工系や教育センターに限らず、進学先の大学は、意外なほど、静岡、東京のみではなく、全国各地を考慮に入れている、という印象を筆者はもっている。

22 留学生を含む関係者数人からの聞き取りによる情報。

23 第2回ベトナム広場にて配布された冊子資料、『日本語学校自立論集(1) 私と学院の履歴書(2002年4月) 理事長 末続晨一郎』学校法人 国際ことば学院、17頁より引用。

24 表記は、本文のまま。

## 静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れ

Quoc Dung)

住所(略) TEL(略)。

私は、1971年ベトナム人留学生として日本の東海大学に入学しました。-略-

5年前体制が変わり、ドイモイという経済変革政策が国家の承認を得て導入されました。やっと資本主義世界の国々と同じ様に人々が自由に法律を守りながら自立することができるようになりました。

私も20年以上日本に住んでいる経験を生かし、日本とベトナムとの橋渡しになるような仕事をしたいと思っています。そこで、まずベトナムで日本語学校を開き、学生の交流を手助けしながらベトナムと日本の情報センターとして整備してゆきたいと思っています。将来ベトナムと交流を希望している方々にいろいろなサービスを提供できるようにしたいと思っています。そのためにも、日本語学校設立にぜひ、ご協力ください。」

1994年2月の『地球通信』には、「アジアをはじめいろいろな国々から、勉学意欲旺盛な若者をこれからもどんどん入学させていきたいと思っておりますので、ご支援よろしくお願い致します。」とある。

その後、入管に対する書類を提出した1994年4月生の国籍内訳は、中国14名、韓国6名、ベトナム5名、フィリピン2名、インドネシア2名、バングラディッシュ9名というように多様化した。室伏勇男氏の呼びかけた日本語学校設立は、ベトナム訪問団の実施、さくら日本語学校再建へという形で具現化し、その後、ことば学院は、さくら日本語学校から継続的に多くのベトナム人を受け入れるようになった。

この流れを『地球通信』から見出し風に概観すると次の通りである。①1994年6月「ご案内」「ベトナムからの留学生5名の入学が決まったのを機会に、ベトナム訪問団を組織することになりました」「案内は、室伏勇男(ブイ・コック・ユン)氏と木内永人(グエン・ビン・トロン)氏をお願いする予定です」。②1994年8月「いよいよ出発!」「日越友好交流会と共催で、ベトナム訪問を企画してきましたが、団長の室伏氏以下12人で、-略-」。③1994年11月「『さくら』を再建!!」「◆さくら:1989年、ベトナム最初の日本語学校として設立。その後、文化省に移管。最盛期の生徒数700人」。④1995年5月「さくらスクール通信・シー先生来静」「さくらスクール設立当初からこの学校をささえてこられたシー先生が、あこがれの日本へ短期留学されました。」「シー先生は『静岡の人は、ベトナム人と同じようにこころがあたたくてやさしい。顔を見て、ちょっと話をしてみるとわかる』『学生を、ぜひ静岡に行かせたい』と語っていました。また、ベトナム中部出身の先生には、静岡の風景のなかでもとりわけ山々の美しさが目にしみたようです。」⑤1995年11月静岡日越経済・文化交流協会設立。

このうち木内永人氏もシー氏も、筆者(比留間)は個人的によく知っている。筆者がかつて(1991年~1992年)さくら日本語学校で日本語教師をしていたからである。木内氏はさくら日本語学校の創設者であり、元留学生で東京在住ベトナム人である。

シー氏は、初期のさくら日本語学校の元生徒で、さくら再興の立役者の一人であり、「日本」に対する思い入れが人一倍強いように思われる。シー氏はその後、日本に留学する学生の相談役となっており、静岡に（さくら日本語学校の学生の行き先には長く、静岡のほか、東京もあった）留学生が来る背景の一つとして、シー氏のような人物の影響も見過ごしてはならないだろう。

#### (4) 静岡県内の大学別の受け入れと協定校

##### ・初期（1990年代半ば）のベトナム人留学生：4大学の事例

先に見た、日本語学校で学んだベトナム人たちが卒業後、静岡県内の大学や大学院に進学したのが、1990年代半ばから現在に至る、静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れの始まりである。そのことを、初期のベトナム人留学生受け入れ拠点となった4大学の事例を通して具体的にみていきたい。以下は、個人名が必ずしも明らかではなかった各大学の記録に、個人名がわかることの多い日本語学校（教育センターとことば学院）の資料を重ね合わせて再構成したものである。

##### <静岡大学の場合>

1990年代に入ってから、静岡県の大学で最も早期にベトナム人を受け入れたのは、静岡大学であった。1996年、非正規の学生を1名受け入れた。おそらく教育センターで2年間学んだグエン・ティ・トゥイ氏（女性）である。トゥイ氏は静大大学院を出た後、さらに岐阜大の大学院に進んだ。1997年、農学研究科では正規の学生として1名を受け入れた。これが先のグエン・ティ・トゥイ氏であろう。同年には、非正規の学生が1名いるが、おそらく工学研究科の研究生で、教育センター出身だと思われる。1998年、工学部が1名を受け入れた。おそらく、ことば学院出身のフィン・アン・キエム氏であろう。他に、大学院に3名が在籍していたが、トゥイ氏（農）の他の2名は未詳である。1999年、大学院に正規学生3名が在籍している。そのうち2名は、おそらくグエン・ゴク・バオ・リン氏（ことば学院出身）、チャン・ティ・タン・イエン氏（ことば学院出身、女性）であろう。二人とも理工系だったらしい。

##### <県立大学の場合>

県立大学にベトナム人留学生が最初に所属したのは、1997年であった。3人いたらしい。一人は、グエン・ゴク・バオ・リン氏であった。バオ・リン氏は、先述した、1999年に静岡大学の大学院に進学した人物（ことば学院出身）と同一である。二人目は、科目等履修生ウン・ドゥック・アン・ダン氏で、ことば学院出身。以上の2人は非正規であったが、三人目のゴー・ヴァン・ハウ氏は経営情報学部の正規学生であった。ハウ氏は、教育センター出身で、県立大で修士を修了した後、東京で就職し、現在も東京で働いていることもわかっている。

翌1998年に、おそらく、科目等履修生であった先述のウン・ドゥック・アン・ダン氏が学部正規生になった。1999年、経営情報学部には3人が正規に在籍している。こ

## 静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れ

のうち2人はゴー・バン・ハウ氏とウン・ドゥック・アン・ダン氏であろう。残りは未詳だが、3人ともに教育センター出身であった。

＜静岡産業大学の場合＞

1998年にゲン・ビッチ・チャム氏（ことば学院出身）、1999年にディン・タン・フン氏（ことば学院出身）を正規学生として受け入れたことがわかっている。後述するように、静岡産業大学は2009年現在、静岡県内で最も多くのベトナム人留学生を受け入れる機関となっている。

＜静岡英和大学の場合＞

1999年に科目等履修生としてゲン・ゴク・ビク・タック氏（ことば学院出身）を受け入れている。

・受入機関別ベトナム人留学生数の推移

表5は、静岡県における受入機関別のベトナム人留学生数の推移<sup>25</sup>である。ここからおもに以下の4点を指摘することができる。

第一に、ベトナム人留学生の受入経験のある機関は総計12機関ある。

第二に、継続的に受け入れている機関としては、産業大、県立大、静大、英和大、英和短大及び浜松医科大（2000年以降から若干名ずつ）の5機関である。

第三に、とくに浜松医科大は、おそらく、県内唯一の医療系での受入という点でも特徴をもっている<sup>26</sup>。

第四に、5機関の受入数の推移は大学ごとに異なるが、特に2007年度以降、産業大、県立大、静大における急増ぶりが目立っている。なお県立大では2009年度現在、中国人留学生について2番目に多いのがベトナム人留学生となっている<sup>27</sup>。

・静岡県内受入機関別・出身国別外国人留学生数（2008年5月現在）

静岡県留学生等交流推進協議会（2000年度以降）が作成している、静岡県内の受入機関別・出身国別外国人留学生数（2008年5月現在）によると、25の受入機関（国立3、公立1、私立21／大学17、短大7、高専1）が、38の出身国からなる、総数1,489人の留学生を受け入れている。出身国のうちアジアは最多の16を占め、国別では多い順（人数と構成比）に、①中国（1103人、74.1%）、②韓国（84人、5.6%）、③ベトナム（63人、4.2%）、④インドネシア、⑤マレーシア、⑥スリランカ、⑦ミャンマーというように、ベトナムは3番目に多い。

学生数に占める留学生の割合は、①浜松大（17%）、②産業大（15%）、③富士常葉

25 1996年～2008年。一部2009年含む。静岡大学及び県立大については大学から提供してもらった1996年～1999年度の情報も加えた。

26 静岡県立大学・短大の看護学部は留学生受入を行っていない。

27 2009年6月時点で、中国64人、ベトナム18人、韓国8人、スリランカ・ミャンマー7人。

(12,8%)、④英和(8,0%)、⑤英和短大(7,0%)と続く。このうち、浜松大、富士常葉大は中国人に特化していること、産業大、英和には中国人も多いが、国籍上の多様さも見られることが指摘できる。この点、県立大(3,2%)、静大(2,3%)は、留学生の割合はさほど多くなく、国籍上は多様さがみられる、ということができよう。ベトナム人留学生については多い順に、①静岡産業大(26人)、②県立大(14人)、③静大(12人)、④英和大(5人)、⑤英和短大(4人)、⑥浜松医科大(2人)となっている。

・ベトナム人留学生の内訳：3大学の事例(2009年6月時点)

表6.7.8はベトナム人留学生受入主要3大学における、専攻、正規/非正規、性別の内訳である。静岡産業大学の場合、情報学部の2学科(計23人)に多いことが目立っている。聞き取りでは、情報学部のある藤枝キャンパス(経営学部は磐田キャンパス)では、学長方針として、留学生を積極的に受入れていくことになっているという。県立大の場合、経営情報学部・同研究科に多いことが目立つ。静岡大学の場合、特に理工系に多い(10人。対して文系は5人)ことが目立っている<sup>28</sup>。

・協定校(2009年7月現在)

ベトナムの大学と正式な協定を締結している機関はまだ少なく、かつ昨年度(2008年)に始まった新しい動きである<sup>29</sup>。静岡大学では、①ノンラム(農林)大学(2008年8月)との大学間協定、②教育学部とフェ高等師範大学(2008年11月)の間の部局間協定がある。県立大学では、環境科学研究所とフェ大学/科学大学部(2008年8月)の間の部局間協定がある。

### 3. ベトナム人留学生からみた静岡での暮らし

以上では、静岡県のどのような機関がこれまでにベトナム人留学生をどのくらい受入れてきたか、という点を中心にみてきた。次に、筆者の短期フィールドワークから得られた資料をもとに、ベトナム人留学生たちの静岡(もっぱら静岡市に限定されるが)での暮らしの実像にできるだけ迫りたい。

(1) 日本の都道府県別ベトナム人留学生数

表9は、2008年現在の都道府県別ベトナム人留学生数である。多い順に、①東京(865人)、②大分(228人)、③千葉(199人)、④愛知(151人)、⑤大阪(146人)、⑥

28 表8には次のデータは含まれていない。静岡大学では、フェ市で現地入学試験を実施し、その合格者3名が2009年度後期より、浜松キャンパスで学んでいる。

29 静岡産業大学では、ホーチミン市の大学と協定を結ぶことを目的として、これまでに現地視察を行っている。

## 静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れ

京都(110人)、⑦神奈川(91人)、⑧静岡(77人)となっている。総数(2,873人)に占める東京の割合は30.1%であり、静岡の割合は2.6%である。

## (2) 物理的生活環境

留学生の生活環境を物理的なレベルと、社会関係・精神生活のレベルの2つに分けてみていく<sup>30</sup>。まず物理的生活環境として、学費・奨学金、アルバイト、住居、移動手段についてみていく。

学費は進学先を勘案する上で大きな判断基準となっている。例えば、次のような話が聞かれた。「日大か県大かで迷っていた。学費のことで県大にした。県大は学費が減免され助けてくれる。この点は、国費や奨学金をもらっている人には関係ない。そうでない人は、勉強とアルバイトの両立が大変。奨学金は縁があるかないかなので、それよりも学費がポイントになる。」

奨学金は、一部の人々の間では、教育センター出身者のほうが、ことば学院出身者よりももらいやすいという見方がみられるが、ある教育センター出身者の学生は否定した。この学生の場合、一つには、次のように申請書を大学の教員や友人に見てもらったことが大きいように筆者には思われる。「学部1年次は、学習奨励金 JASSO(日本学生支援機構)から5万円。申請のとき、日本語学校から成績が優秀(留学生試験)という推薦状を出してもらった。2年次は●●●から3万円。A先生にレポートをチェックしてもらった。A先生は、留学生に対してやさしいから。例えば、授業中、わかっているかと確認してくれる。テキストをくれる。3年次は、●●から。日本語の文法は日本人の友人にみてもらった。いまは4月から●●。東南アジアからの留学生に対するもの。10万円2年間。B先生(指導教官)の推薦状をもらった。研究計画をみてもらった」。

アルバイトは、日本人学生の少ない夜間のコンビニエンスストアや工場のほか、居酒屋に多い。個人を相手にしたベトナム語の家庭教師を行っている場合もしばしばみられる。

住居は小鹿周辺にベトナム人が多く住むアパートやマンションが何軒か集まっている。小鹿に多い理由の一つは、静岡大学の学生が以前入居していたが、現在は建物が古いなどの理由から日本人学生がほとんど入居しない物件が多いからである。ベトナム人だけではなく、インドネシア人、ミャンマー人も同じ様な形態で小鹿周辺に住んでいる。

移動・通信手段は必需品となっている。ここでは特に日本人学生と違う可能性のある事柄について述べたい。移動手段では、日本語学校時代は自転車、大学生はバイク

30 教育センターで日本を学ぶ外国人就学生・留学生からみた静岡のよい点として、市毛氏は、気候が温暖であること、ホスピタリティ(やさしいなど)、中規模地方都市の中では割合アルバイトがあることを挙げた(第2回「ベトナム広場」での講演より)。

が多いという話を聞いた<sup>31</sup>。通信手段では、パソコンは、ベトナム語の情報を入手する他、スカイプ<sup>32</sup>を使ってベトナムや海外在住の家族や友人・恋人（実例としては、オーストラリアやフランス在住の恋人）と頻繁に連絡を取っていること、ベトナム語の音楽を流すことなどが挙げられる。携帯電話は、現在ではほとんどのベトナム人留学生がソフトバンクを利用しているらしい。夜の一定の時代以外は、ソフトバンク同士であれば無料であることによる。ある留学生の話では、以前auを使っていた頃は全くと言ってよいほど誰からも電話がかかってこなかったが、ソフトバンクに換えたところ、一日に何度もいろいろな人からかかってくるようになった。夜中に「おなか痛い」と言ってかかってくる時もあるという。ある日本人が、ベトナム人アルバイト生がしきりに携帯電話で話をしてしていると述べていたが、筆者の印象では、以下に示すように、ベトナム人の学生たちは普段は忙しくてお互いに直接会うことができないため、余計に携帯電話を利用する回数が多いのだと思われる。

最後に、ある学生の一日の過ごし方と生活費を紹介したい。この学生は、2009年6月時点で、学費は免除されているが、奨学金、仕送りは無く、アルバイトでやりくりしている。移動手段は50ccのスクーターで、住居は小鹿の古いアパート（風呂、トイレ、洗濯機は共同）、6畳1間である。筆者の観察では、部屋の中に小さいながらも自炊できる流し台があったほか、とくに出国前に家族から贈られたメッセージや自分を叱咤激励する（主旨は、勉学に励め、というもの）文言を壁に掲げていることが強い印象に残った。

一日の過ごし方は、次の通りである。8時半起床。9時から大学。月曜は4限（午後4時10分終了）までである。午後5時から午後10時まで、週5日（月・火・木・金・日）コンビニエンスストア2箇所アルバイトをしている。帰宅は午後10時半から午後11時になる。帰宅後、シャワーを浴びてテレビをみて就寝する。「ゆっくり勉強できない」。コンビニエンスストアのほか、大学でのアルバイト、ベトナム語の家庭教師をしている。家庭教師は準備に丸1日（土曜日）かかる。バイト代は1ヶ月に、6万から7万円で、「多くない」。

一ヶ月の生活費は、家賃（光熱費含む）が2万5000円。携帯電話代が1万円、食費（自炊+大学の食堂）が1万5000円で、計5万円である。

### (3) 社会関係・精神生活

留学生たちは多様なソーシャル・ネットワークを築いている。特に静岡での暮らしの特徴は、日本語学校を介して形成したソーシャル・ネットワークが進学後も存在しつづける点にあるといえるだろう。その中には、日本語学校の先生、保証人やサポー

31 その理由は、日本語学校時代は、①日本語学校と自宅との往復のみ、②進学先が他府県になった場合、バイクは引越しの際に不都合、といった説明が聞かれた。

32 インターネット回線を使った動画通信。

## 静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れ

ター、ベトナム人のセンパイ、コウハイ（毎年増える新規のコウハイを含む）、友人のほか、ベトナム人以外の国籍の友人、国際交流関係の諸機関・団体の人々<sup>33</sup>、ベトナム料理レストラン<sup>34</sup>を介した人々などが含まれるであろう。

このうち筆者にとって特に「発見」であったのは、センパイーコウハイ関係である。まず、ドンズー日本語学校のホームページ（ベトナム語）を見ていて、一箇所だけ「senpai-kohai」というようにアルファベット表記の日本語が用いられていることが目を引いた。その後聞いた話を総合すると、センパイーコウハイのつながりは、特にベトナム人留学生の間で機能を果たしている、という。2つの日本語学校ともに、来日直後の手取り足取りの世話（空港への出迎え、移動、弁当の買出し、外国人登録手続きへの同行など）は主にセンパイが行っているらしい。また、ドンズーの場合、ホエ先生の意向もあり、とくにセンパイーコウハイ関係が高い機能を果たしているようである。たとえば、とくにセンパイーコウハイ関係が機能していた数年前までは、センパイが、一人のコウハイのために2つずつアルバイトを来日前に確保していた、という。進路相談などいろいろな場面で日本語教師以上の存在になる場合もあり、日本語学校側にとっては多少ジレンマともなっている。また、センパイの大きな「干渉」は、場合によってはコウハイにとっても逆機能として働く場合もあることもわかった。

余暇やレジャーは、先に見たように、金銭上も、時間上も余裕がないため、ベトナム人留学生同士が頻繁に集まって多額のお金を使って遊んでいる、という様子はほとんどないようである。普段はめったに会うことのないあるアパートでは、誕生日会を催すことが大勢で集まる数少ない機会となっている。週末に大学のグラウンドで、午後数時間サッカーの試合を行い、その後、その一部で夕食とアルコールを共にしている男性グループもある。時々インドネシア人やミャンマー人のグループを試合をしたり、その後の酒宴に女性のベトナム人留学生や、多国籍の友人（日本人を含む）が参加したりすることもあるという。

#### (4) 大学卒業後の進路

大学卒業後の進路について、まずこれまでに県立大学を卒業した13人の結果について、ついで2009年現在、各大学に在学中の12人の計画や考え方についてみていく。

33 調査の過程で、ベトナム人留学生たちが、勉学とアルバイトなどで多忙な中、なぜボランティアで国際理解や国際交流などのイベントに協力するのが筆者は理解しがたく思われてきた。次のような一つの考え方を聞いたことも筆者にとって「発見」であった。「日本人との人間関係を重視している。友人や●●グループ。日本人家族の子どもとして交流する。着物を着せてもらったり。大学2年生の頃から掲示板をみてはじめて。3年次にふじのくに親善大使に応募。なぜかという、留学生は日本文化に慣れることを求められるから、逆にベトナムのことを教えたい。」（文系修士、女性）

34 漆畑氏の長男が経営する「サイゴン」ではアルバイトを雇ったり、「ソッソ」はことば学院の保証人になっている。とくに伝馬町の「アンナム」のオーナーの2人はことば学院出身で、一人は静岡県立大学大学院修了後、ホーチミン市の私立大学で日本語教員をしていた、という経歴を有する。また「アンナム」ではアルバイト生も若干雇っている。



### ・県立大学卒業生の進路

2002年～2009年3月に卒業した13人の内訳は、日本への残留組が10人、帰国組が3人。残留組のうち、進学（修士、博士）が6人。進学のうち県立大が4人、他大学（横浜国立大国際社会科学、静岡大学）が2人。日本企業への就職が4人で、その内訳は、SE、ソフトウェア会社、事務、営業である。帰国組のうち、ベトナムの大学教授が2人、帰国が1人である。13人中、県立大及び静大に進学した5人以外は、静岡以外の場所へ移動したことになる。

### ・12人の留学生のライフプラン

面接対象者の事例数が少なく、個人が特定されてしまう恐れがあるため、現時点で一覧表を示すことは差し控えたい。まず、面接調査に協力してもらった12人の留学生には、日本を含めた外国との接点という点で、次のような特徴を読む取ることができるように思われる。第一に、ほとんどの留学生に、家族・親族・友人・恋人に欧米滞在者がいることは、一つには、歴史的に、旧社会主義国（ソ連、東欧）を含めた欧米とのかかわりが強いというベトナム近現代史を反映したものであり、もう一つにはとくに1990年代以降東西冷戦後のグローバル化時代を映し出したものということができる。第二に、個人的な知り合い（ツテを頼って）から勧められて日本留学に至ったという点には、刷新とよばれるドイモイ（1986年）以後の日本とベトナムの関係史を背景としている、ということができる。

また、とくに確認しておきたいことは、漠然としたイメージとして欧米などを知っているのではなく<sup>35</sup>、諸外国の留学について具体的で現実的な情報を入手できるネットワークを有していることである。

このような中、卒業後の進路についても、必ずしも日本への就職だけを考えているわけではない。経済成長が著しいベトナムへの帰国以外にも、恋人や親戚、友人のいる欧米や、就職する外国人に対してより良い条件が整っている（らしい）シンガポールなど、グローバルな選択肢も視野に入っている。もちろん、（日本語学校を経た場合は6年に及ぶ）日本滞在の経験は非常に大きなものであり、できれば日本企業に就職したいという希望者は少なくなく、そう希望する気持が強いのも事実である。しかし、留学生たちの口からは、日本企業への就職の難しさ、日本企業の時間のかかる出世や、下積み時代の仕事内容を敬遠する気持、永住資格取得の難しさ、特に女性の場合は結婚時期などを気にする言葉が聞かれた。このようなジレンマの中、どのように折り合いを付けていくかという決断を迫られているのも、看過してはならない暮らしぶりの一面であろう。

関連して補足資料を2つ示しておく。表10は、オーストラリアの研究所（IDP）に

35 1980年代の中国人留学生の場合、このようなケースが多かったとされる（坪谷2002）

静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れ

よる、留学生送り出し国トップ30の予測値の一つである。このシナリオ（横ばいシナリオ）によれば、2000年時点ではベトナムの留学生送り出し数は1万7598人であり、トップ10に入っていないが、2025年の予測値では中国、インド、マレーシア、韓国について5番（12万7293人）になっている。表11は、2007年時点における諸外国におけるベトナム人労働移民の概要を示したものである。ベトナムが現在すでに、移民送出大国化していることを物語っている。

この2つの表（表10、表11）は、ベトナム人の諸外国への留学が今後かなり「あたりまえ」になり、かつ諸外国での労働移民がすでに急増している中で「日本」の「留学生」としてどのような位置取りをするのか、という視点を留学生たちが今後ますます考慮に入れていかねばならなくなることを予感させるものである。

#### 4. おわりに

静岡におけるベトナム人留学生受入および留学生の暮らしぶりを対象とした調査研究により、とくに以下の諸点について指摘することができよう。

第一に、従来のベトナム人留学生研究は、東遊運動や南ベトナム留学生の例のように、日本政府に対する批判や異議申し立てする存在として対象化されてきた感が強かった。「当事者たちのトータルな生活と発達の内実を正確に把握する」ためには<sup>36</sup>、とくに今後は、本稿の後半でみたように、①情報ネットワークの厚さ、②複数国への越境が可能となった、グローバル化時代の日本留学という視点を踏まえることが重要になってくるであろう。

第二に、静岡は、ベトナム人留学生受入れの歴史において、日本の中でも、かなり稀有な物語を有した場所であるということを確認することができた。例えば、一つには東遊運動との深いかかわり及びそのことを資源として積極的に活動を展開している<sup>37</sup>浅羽町があること、もう一つには2つの日本語学校があることなどが挙げられる。

第三に、本稿の限界や今後の課題について述べたい。短期調査であったため、本稿では特にフィールドワークから得られた知見が不十分である。また、静岡市を中心とした調査であり、西部、東部については今後の課題である。さらに、とくに6人を対象とした個人面接で得られた資料は、今回の調査の中で筆者にとって最も興味深く、

36 「現実の留学生・就学生・研修生・技能実習生は、いうまでもなく単なる低賃金労働者ではない。また彼・彼女たちは、狭義の学習・技術移転、および国際交流・多文化共生・人権等を実現するために生きているわけでもない。彼・彼女たちは、何より一人の人間として、自らの「生命-生活(life)」の発展的再生産を求め、その必要に基づいて世界社会を再構築する主体である。たとえ留学や研修が「学習・技術移転」を目的とする制度であっても、「留学生・研修生であること」が彼・彼女たちのすべてではない。そしてこうした当事者たちのトータルな生活と発達の内実を正確に把握することを抜きには、就学・留学・研修・技能実習の真の歴史的・社会的意義をつかむこともできないのである。」(浅野2007:i)

37 浅羽ベトナム会では、今後、ベトナム人留学生を多数、ホームステイとして受入れることを計画している。

しばしば感銘を受けたものであったのだが、本稿の中では、ほとんど全くといってよいほど盛り込むことができなかつた。それらは、家族親族の背景と其中的留学生個人の人生観や考え方、ベトナムの歴史的文化的背景に固有の問題などに関する情報であり、「こんな話は誰にもしたことがない」と言いつつ筆者に話してくれたものも多い。このような貴重な資料を、どのような研究目的をもった論文の中で、個人が特定されない形で、もっとも適切に用いることができるかについて考えていくことも筆者に課された課題である。

### 参考資料

表1：1999年末の日本在住ベトナム人（単位：人）

在留資格	1999年
特定活動	2,170
研修	1,619
留学	599
就学	92
来日中のベトナム人	4,480
定住者	5,401
永住者	3,903
その他	1,114
日本在住ベトナム人	10,418
総計	14,898

出所：(戸田2001:3)

表2：主な在留資格の在日ベトナム人数の推移（単位：人）

主な在留資格 \ 年	2003	2004	2005	2006	2007
技術	125	197	386	790	1,536
技能	105	135	168	168	194
留学	1,545	1,761	2,165	2,472	2,930
就学	314	802	924	1,005	803
研修	3,528	3,491	3,380	5,148	6,704
永住者	6,273	6,697	7,065	7,462	7,930
定住者	4,792	4,929	5,103	5,236	5,342

出所：『出入国管理』（平成20年度版）法務省入国管理局を基に筆者作成

## 静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れ

表 3：静岡県における主な市町村別ベトナム人数

市町村名	人数
浜松市	1,020
静岡市	312
沼津市	155
湖西市	76
磐田市	57
袋井市	52
富士宮市	49
富士市	47
伊豆の国市	39
菊川市	10
その他	258
計	2,075

出所：静岡県県民部多文化共生室多文化共生スタッフ『外国人登録国籍別市町村別人員調査（速報）』（平成21年2月）を基に筆者作成

表 4 - 1：静岡市在住ベトナム人の在住資格別・性別人数(2009年5月1日現在)

在留資格	男性	女性	計
留学	29	58	87
就学	25	57	82
特定活動	24	18	42
研修	18	10	28
日本人の配偶者	0	18	18
技術	15	1	16
家族滞在	4	9	13
永住者	6	5	11
技能	2	4	6
人文知識・国際業務	4	2	6
その他（短期滞在、投資・経営、定住者）	0	5	5
総数	127	187	314

出所：静岡市

表4-2：静岡市在住ベトナム人の在留資格別・性別人数（2008年6月）

在留資格	男性	女性	計
留学	24	40	64
就学	33	64	100
研修	15	14	29
・			
・			
・			
総数	114	167	281

出所：静岡市

表5：受入機関別ベトナム人留学生数の推移（静岡県留学生等交流推進協議会の資料等に基づき筆者作成）

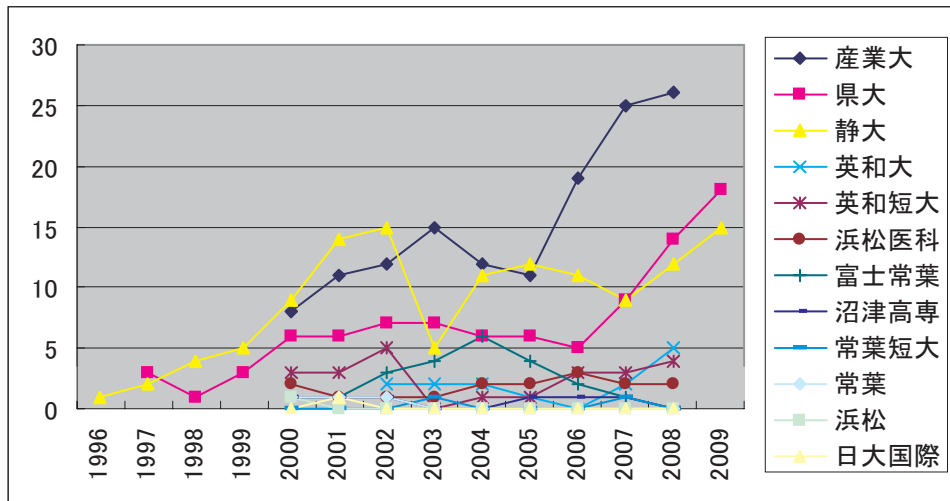


表6：静岡産業大学ベトナム人留学生数の内訳(2009年度)

	情報学部		経営学部	計
	情報デザイン学科	国際情報学科		
男	9	3	4	16
女	4	7	3	14
計	13	10	7	30

出所：静岡産業大学国際センター提供資料(2009年7月)に基づき筆者作成

## 静岡県内の大学におけるベトナム人留学生の受け入れ

表7：静岡県立大学ベトナム人留学生数の内訳(2009年度)

	学 部			大 学 院				研 究 生		計
	経情	国際	食	経情	国際	薬	生	経情	国際	
男	1	1	0				1	2	0	5
女	5	0	1	3	1	1		1	1	13
計	8			6				4		18

出所：静岡県立大学学生室提供資料(2009年7月)に基づき筆者作成

表8：静岡大学ベトナム人留学生数の内訳(2009年度)

	学部正規生			大 学 院 正 規 生					非 正 規 生			計
	人文 1年	工学 4年	農学 1年	人社 2年	教育研 2年	工学研 1年	工学研 2年	自 然 科学系 1年	人文	情報	工学	
男	0	3	0	0	0	2	1	1	2	1	0	10
女	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	5
計	5			6					4			15

出所：静岡大学国際交流チーム提供資料(2009年7月)に基づき筆者作成

表9：2008年都道府県別ベトナム人留学生数

地方名	留学生数	都道府県	留学生数 (順位)	地方名	留学生数	都道府県	留学生数 (順位)
北海道	15	北海道	15	近畿	388	三重	38
東北	111	青森	14			滋賀	10
		岩手	43			京都	110(6)
		宮城	35			大阪	146(5)
		秋田	7			兵庫	74
		山形	1			奈良	3
関東	1,369	福島	11			和歌山	7
		茨城	36	鳥取	3		
		栃木	22	島根	6		
		群馬	45	岡山	24		
		埼玉	111	広島	70		
		千葉	199(3)	山口	6		
中部	450	東京	865(1)	四国	49	徳島	14
		神奈川	91(7)			香川	6
		新潟	73	愛媛	25		
		富山	12	高知	4		
		石川	42	福岡	71		
		福井	14	佐賀	14		
		山梨	10	長崎	22		
		長野	33	熊本	23		
		岐阜	38	大分	228(2)		
		静岡	77(8)	宮崎	4		
愛知	151(4)	鹿児島	7				
				九州	382	沖縄	13
						合計	2,873

出所：日本学生支援機構

表10：留学生送り出し国のトップ10(横ばいシナリオ)：IDPによる予測値(単位：人)

2000年トップ10		成長率	2025年トップ10		成長率
中国	327,351	10,8%	中国	3,195,916	10,8%
インド	110,754	7,8%	インド	628,088	7,8%
韓国	90,405	3,2%	マレーシア	248,754	6,8%
日本	66,034	0,5%	韓国	178,158	3,2%
ギリシャ	65,228	1,3%	ベトナム	127,293	3,2%
マレーシア	62,242	6,8%	トルコ	114,632	4,3%
ドイツ	55,452	1,0%	モロッコ	110,208	3,4%
モロッコ	50,083	3,4%	バングラデシ	102,395	9,2%
トルコ	48,722	4,3%	パキスタン	98,000	9,0%
台湾	46,423	2,8%	インドネシア	97,163	6,6%

出所：(横田2007) 所収のIDP,Global Student Mobility 2025:Analysis of Global Competition and Market Share,IDP Education,Canberra,2003. p.56を基に筆者作成

表11：2007年、諸国におけるベトナム人労働移民

行き先国	総数(人)	仕事の種類	平均月給
台湾	149,696	・生産労働者 ・建設労働者 ・船舶会社での労働者/船乗 ・家事手伝い ・看護補助	300-500 USドル
マレーシア	156,888	・電気機器生産労働者 ・縫製衣料労働者 ・建設労働者 ・サービス業	150-200 USドル
韓国	71,500	・生産労働者 ・研修生 ・農業分野労働者 ・船舶会社での労働者/船乗	1450-1,000 USドル
日本	30,343	・研修生 ・電気機器生産労働者 ・船舶会社での労働者/船乗	1,000-1,500 USドル
英国	560	ホテル従業員、メイド	13,00-25,00 USドル
合衆国	40	農夫	1,250-1,600 USドル
アラブ首長国連邦	1,800	・建設労働者 ・電気機器生産労働者 ・サービス業、レストラン 及びホテルスタッフ	400-1,000 USドル
サウジアラビア	400	・建設労働者 ・雑役婦	160-300 USドル

出所：Department of Oversea Management,MOLISA,2007.を基に筆者作成

## 参考文献

- 朝日新聞社 2006 『ニッポン人脈記2 アジアの夢』朝日新聞社
- 安間幸甫編 2003 『浅羽佐喜太郎と東遊運動』浅羽佐喜太郎公紀年碑建立八五周年記念事業実行委員会
- 浅野慎一 2007 [1997] 『増補版 日本で学ぶアジア系外国人 ―研修生・技能実習生・留学生・就学生の生活と文化変容―』大学教育出版
- 池上重弘 2009 「グローバル化時代の日本留学 日本の留学生受け入れとインドネシア人留学生」奥島美夏編著『日本のインドネシア人社会 国際移動と共生の課題』明石書店
- 川上郁雄 2001 『越境する家族 ―在日ベトナム系住民の生活世界』明石書店
- 樽松佐一 2008 『トヨタの足元で ―ベトナム人研修生・奪われた人権』風媒社
- 国際ことば学院 2009 『地球通信 (上巻) 第1号1993年3月より第100号2002年6月まで』
- 静岡県留学生等交流推進協議会 2000,2001,2002,2003,2004,2005,2006,2007,2008 『静岡県内の高等教育機関における留学生の現状』
- 静岡県県民部多文化共生室多文化共生スタッフ 2009 『外国人登録国籍別市町村別人員調査(速報)』(平成21年2月)
- 静岡総合研究機構 2008 『SRI 特集 静岡と他地域との新たな連携(国際編)』第93号
- 白石昌也 1993 『ベトナム民族運動と日本・アジア ―ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識―』巖南堂書店
- 栖原暁 1996 『アジア人留学生の壁』NHKブックス
- 田中宏 2008 [1995] 『在日外国人』岩波新書
- 坪谷美欧子 2002 「日本「留学」「就労」の意味 ―滞日中国人における準抛集団とその変容」小倉充夫・加納弘勝編『東アジアと日本社会』東京大学出版会
- 戸田佳子 2001 『日本のベトナム人コミュニティ ―世の時代、そして今』暁印書館
- Dong Du Students Group in Japan (ウェブサイト、2009年7月18日閲覧)
- 日本学生支援機構(JASSO) 2006 a 『留学生受け入れの概況(平成18年度版)(ウェブサイト、2009年6月閲覧)』
- 2006 b 『グローバリゼーション時代の留学生の就職支援(国際シンポジウム報告書)』。
- 永井道雄・原芳男・田中宏 1973 『アジア留学生と日本』NHKブックス
- 宮島安世 1998 『ベトナム もうひとつの旅』明石書店



- 文部科学省 2006 『我が国の留学生制度の概要 受入れ及び派遣（平成18年度）』  
（ウェブサイト、2009年6月閲覧）
- 2008 「留学生30万人計画」骨子（ウェブサイト、2009年7月3日閲覧）
- 法務省入国管理局 2008 『出入国管理（平成20年版）』平成20年10月24日発行
- 横田雅弘 2007 『留学生交流の将来予測に関する調査研究』（平成18年度文部科学省先導的大学改革推進経費による委託研究）一橋大学 留学生センター・留学生課